210.3
1

ふ。二ノ宮やあるべく。一ノ宮記ふ。底筒男。中筒男。表筒男也。清和天皇実録ふ。貞観元年。正月廿七日。奉授長門国従五位下住吉坐荒魂神。従五位上。同十七年。十月八日。正五位下。同十二月ふ。従四位上を奉られ。光孝天皇仁和二年。十一月。正四位下を奉り給ふ。好古云。府中の西。一ノ宮村ふ在り。後世神后八幡大神。高良。明神。諏訪。神を相殿ふ祭り。五座やしろ。毎年十二月晦の夜。此社の神人や。豊前国早鞆明神の神人や。早鞆の冲ふ出て。稚海藻刈やいふ神支を行ふ。元日の朝御饌ふ奉れり。昔へ朝廷ゝ献りやるべ。

神功皇后御傳記上巻終

سالم

神功皇后御傳記 下

210,3
2

神功皇后御傳記下卷

矢野玄道謹惶記

さてゝ新羅を征伐給ひ〻明る年の春二月、大后御子命二柱その群卿百寮等を領まゝ、穴門豐浦宮ゝ移り幸し、好古云く、宇添邑の東方、穂浪郡大分村ゝ八幡宮あり、古傳ゝ此年神后京へ上らせ給ふゝ誉田皇子を率奉り、大口嶺を越く、穂浪郡ゝ出給ふ時ゝ、皇子ゝ御乳を参らせ給ひし地を、乳呑坂や號く、はゝ其纒ゝ出給ふゝ、山中なゞら廣く平なりしかゞ、眺望くかゝる山中ゝめゝしき大野あり、宣ひし所を、大野やいふ、がく山路ゝ勞き坐く、小高き石上ゝ坐く、息をせ給ひ、四方を眺め給ふ、其石を御腰石や云く、今に有り、大分村ゝ到まゝく、其行宮ゝ留坐る故ゝ、後人さゝを宮の裏やいふ、此所ゝ筑紫の政を定給ひ、陪從の軍兵を国郷へ歸し、縣主村主を所々ゝ分遣さる、故ゝ此地を大分と名く、神亀三年神託ゝ因く、大分村ゝ八幡宮を建く、崇奉らる、宇佐託宣集ゝも、宇佐宮より至も、穂波、大分宮ハ、

東京帝國大學圖書館藏書
東京帝國大學圖書館
登記番号 54355
昭和 28.3.31
寄贈

我本宮なるを詔たまひ、上ふあげたる豊前国なる鏡山の故事ハ、此時の支なるむもえ知らぬやうに先の天皇の御喪を奉ぜ奉ぜ、海路よりて京師に還幸さむやうにふ人心疑ひきふ因ぜ奉ぜ、喪船を一具備へ、御子命をば、其喪船ふ乗奉ぜ奉ぜ、まづ御子ハ早く崩坐ぬやうひ漏れ給ふ。玄道謹ゝ按ふふ、古ハ謂ゆる奇兵ふ、実ハ御子命を喪船ふハ載奉らば、下ふ挙たる如く、密ふ紀伊国ふ幸ましゝめ奉ぜ給ひ、尚喪船ハ、大后の御舟や同く、難波を射ゝ度ゆゝめ給へるなるべし。ぜ、此ふ言漏さゝめ給ふやうハ、下ふ空船を攻給むと上ふ京なる麑阪王、忍熊王、父の天皇ハ、已く崩坐ゝ、皇后ハ西征ふ、ゝ、まゝ、また皇太子新ふ生坐せるを聞く、密ふ謀り給へるハ、今大后御子まゝゝ、群臣皆随ひ奉ぬるべ、必相やもふ議ぜ、幼主を、天津日嗣ふハ即奉るべ、吾等ハ、ゝ、長兄やゝ、幼弟ふハ従ふべきやゝ宣ひ、やがゝ播磨國赤石ふ下ぜ來ましゝ、父天皇の山陵つくるまぬゝ、役を興ひ、船を編ゝ、淡路島ふ縁ゝ嶋の石を運取らせ、其山作ぜの人ぞやふ、兵器を取らせゝ、大后の上ぜ幸ましを待迎ゝ、戦むやうに、明石ふ今も山陵の旧趾存ぜやゝ、或人此條ふ因ゝ、上古ハ農兵一なるぜゝを知るべ、ゝ、大后ましを聞省く、垂仁天皇四世の御孫、弟彦王や申ゝ王を針間や吉備やの間ふ遣ゝ、ゝ逆徒を誅戮なハゝめるまるり。此時関を居ゑゝ仇を防ゝ、ゝ地を和氣関やゝふ、ましの時ふ王ゝみゝ勲功ましやゝ聞えゝ、事平ゝ後吉備、磐梨縣、まゝ藤原縣ふ

やまを封國に賜ふ。此條に、姓氏錄、日本後紀なる、和氣清麻呂卿傳に因るいふ。此卿はやがて弟彦王十一世の御孫にて、和氣をせしなり。和名抄に、備前国和氣郡、御野郡、藤野郷、磐梨郡、和氣郷、美作国勝田郡に和氣郷あり。日本後紀に、今分為二美作備前、丙国造とやなるを合考ふるに、此二国を封地に賜ふなるべし。聞えたり。

宿禰やまと二人やまとに二王に屬きそれぞれ、やがてこれを將軍に任じ、東國の兵を興はしめ給ふ。大上君は、日本武尊の御番吉志は大彦命の後に隷たるなるが、二王に監督皆歴々たる名家なるが、二王に監督まるべきは、威權あるべきを知らるべし。国々に京に留まるべ伊佑比やあるべ、はるばるこの頃同名の人三五十狹茅を記ふ。此人や海上五十狹茅や、岐閉国造なる伊狹知命やなり。思ひ混ふべし。時に、二王やまとに津國なる菟餓野に、いづくに祈ひ狩しに、若事成ることなむに、良獸を獲ることやと誓ひ、二王

各假殿に居しなる時、忽に大なる赤猪出て、假殿に飛登りて、麝坂王を咋殺しなれば、軍士やまとも悉に振ひおぢぬ。菟餓野は、風土記に、雄伴郡なる我野やあるべ、夢野やまとツゲ野やまとは、歌なるべに詠て名高き地也。上田秋成說に後に雄伴郡を改て八田部郡やまと成給ひなるべ。こゝに法隆寺資財帳に、雄伴郡東限弥奈刀川云云、北限伊米野とあるに、へくうら浮和天皇の御名、大伴やまと申を諱てうく改めつるなるべしやまと。実に然るべし。赤猪は、或人の神獸なりやと言る如く、皇神の御稜威のいみじきを知られ給へる。忍熊王、その將倉見別をめして、此事いみじき凶兆なり。はるばる此地に、あくまで敵を待べしやまと宣ひて、軍を引て、住吉に屯みまして、この時情を熟案に、実は已に弟彦王に攻落されて、こゝに引退かれしなるもあるべしか。あくまで御祖命は、播磨國に還幸まして、風土記、印南郡大國里なる伊保山の

下ノ帶中日子命乎坐於神二字殯宮ヵの誤ヵ而息長帶日女命擎石作連來而求讃岐國羽若石也同国阿野郡羽床郷波以可ヤ和名抄ノ見ヘタル地ヵとヤ自彼處度賜未定御盧之時大來見顯故曰美保山盧ハ盧大ハ犬ヵ人の誤ヵ宍禾郡石作里の名義を釋ク石作首等此村ノ居ル故ノ庚午年ヲ石作里ヤ云フ。それヤハ言ハヌ。極ク此御時ヨリ右の石作連ガ子孫の遺住ル ヲ。猶 揖保郡荻原里の謂ヵと解ク。息長帶日女命韓國ヨリ還上ヲ時御船ヲ村ノ宿ヲ一夜の間ノ高一丈許の荻根ヲ引ク。ヨリて御井を闢キ故ノ針間井ヤ云フ。その荻多ク榮エタル故ノ其地を荻原ヤ云フ。此外ノ韓清水酒田傾田の故事ヵ

皇典翼ノ就ク見ル。荻ハ神名帳ノ賀茂郡平凝原神社ノ名ヵバヨリギヤ思ヘド針間井のこヤを按ズ。萩誤ノ榛ノ例ヲ引ケ播磨国ヤ云フも後風土記ノ訓ヲ訓ヲ。ヤ云フ。此針間ヨリ出ル称ヤ。ムカシ此も荻の夏ヲ生ズ似タル例を引ケ。日本後紀ノ弘仁六年安房国ヨリ蘆の長三丈圍一尺ヲ二枚献ヲ見ヘ常陸風土記ノ行方郡麻生里ノ長一丈圍大竹の如き麻の生ル ヤ。一夜ノ物の生ル支ヵ神代ノ天日鷲命と長白羽神神ヵ。一夜の間ノ麻ヤ穀木ヤを生茂ラシメ坐セル由古詣拾遺ノ紀ヲ。景行天皇御代ノ武田折命ノ賜ヒ田ノ一夜の間ノ竹の生ヒ。姓氏録ノ見ヘ尾張国春部郡ノ川瀬連ヤ云フ姓を賜ヒ。連田を作ル。一夜ノ藤の生ヒ。尾州記ノ見ヘ。天暦元年天満宮の神態ノ。京の右近馬場ノ一夜の間ノ松の數千本生ヒ。天暦記宣記天神記同御傳記ヲ見ヘタルヲ考合ヒ。ヲ大后武内宿禰ノ詔ヲ

ヒ。御子命を懷ヒ奉ル。南海ノ出ル紀伊の水門ノ泊

はせ給ひ。その時上ゐなる如く。彼喪船と陽言るい。津国に向まくなむ御子命を。木国へ幸はを奉られし支い。岡部東平云く。ちい御心ぞ。至なく住吉に戦ひ給をむ時。紀伊に廻るをも襲討むの策を至やうりはも有ぞ。紀伊水門い。神武天皇紀をる。男水門やある地に。紀伊名所図會の海部郡。衣奈八幡宮の下に。古老傳云。應神天皇の御船。富郡大引浦に著し。夫より上陸し給いく。此地に行宮を建く。暫し坐しられば。土人尊ひ。其遺趾に神宮を造て。後世八幡宮や尊崇奉るやも。中古縁起に。むうし大三木浦に。岩守やいふ者あり。天皇を迎奉て。丹き盤に。和布を盛て。饗應奉る。天皇岩守に登美の姓を賜ひ。子孫世々この地の下司職を許し給ふやいふ支見ゆ。御祖の御船い。直に難波を射て渡らせ給ふに。海中に廻て

く得進まず。下に引たる津国風土記をる。美奴賣神の夏を考合ふべし。更に務古水門に還坐しくト合はせ給ふ。らしい和名抄に摂津国武庫郡武庫郷やあるく。風土記に皇后をの兵器を埋ませ給ひし所を。武庫やいひしを。今兵庫やいふやいひ。元亨釈書に如意珠また金甲冑弓箭宮矧等を埋み

給ふ故に。武庫やを曰ふや記し。通往ふて。津の川つゝに沿ひく。木深く物ふて。鳥居たる。其辺の人に尋ね侍れば。もれいもしし足姫のもろらしの三の国従をる給ひ。時。この山に。ふろひかぶやなる。埋給ひ。その山をまた。ずく武庫山や申をやいむ。この山を。六甲山やもいふやず。柿本人麻呂朝臣。歌に。武庫の海。船に。黒人連ず。墨吉の得名津に立ちく。見渡をば。六児のやまゆ。いづる。舟人やあるを始て。万葉集にも歌あり。摂津志に。武庫い。乃輪田泊のまやゝ。せり。又矢田部郡鉢伏峰俗傳神功皇后埋兜鍪于此やも云。ふ。天照大御神詔給ひく。朕が荒御魂い。皇居に近づくば。御心。廣田の國に居せ奉るべしや。詔給まふ。やゝ山背根子の女。葉山媛や云ふ人を。齋祭らしめ給ふ。風土記に。皇后。摂津国海濱の北岸。廣田郷に到て給ふ。今廣田明神まします。故にこの海辺を蹈く。御前濱やいひ。また御前澳やいふ。これに脱文あるべけり。御心い廣田

おかる枕詞ゆく。万葉ゆ御心を吉野国ちぢもちめり。和名抄ゆ武庫郡廣田郷あり。神名帳ゆ同郡廣田神社名神大月次相嘗新嘗廿二社註式ゆ或説曰。廣田ハ天照大神の荒魂(アラミタマ)なり。神宮御全体やいふべし。或文の如きハ一座なりと雖も。現在五社やいひく。住吉。廣田。八幡を三社やいふ。南宮ゆ松尾南宮も。八祖神やいふゆ大山咋神。嚴島明神。宗像明神も。已上五座也やと見え。民部省図帳ゆハ。廣田大神。少彦名命。蛭兒やと相殿ゆ。大己貴命。園韓神を祭り。五社やせ王。伯家部類。廣田社神拝次第ゆハ。先南宮次奥戎。次戎社。次今戎。次内王子。次名次。次廣田社。次松原社やと見ゆ。今まと西宮やと申ハやそ。拾玉集ゆ。西の海ゆ。風心せよ。西の宮。東ゆのみや。えびいはふ。嚴島行幸記ゆも。西宮ゆ幣奉らせ給ふもの見ゆ。此社ゆ。嘉祥三年。十月従五位を奉り給ひ。貞観元年。正月ゆ正三位。同十年。十二月従一位を奉られ。同閏月十日。遣使於摂津国。廣田生田。神社奉幣。告文曰。やと摂津の国解しけく。地震の後ゆ。小震止ハ。因て卜求しむるゆ。大神の布志己利給ふもやと申せ。まと先日ゆ。禱申し給ふ支もあり。因て今従一位の御冠ゆ上奉り云云。古今著聞集ゆ。後三條院の御時。国の貢物。廣田の御前の奥ゆく。多く入海の聞えあり。ハ。宣旨を彼社へ下けり。

貢物を全ふせられず。逆鱗あり。社辺の木。一夜ゆ枯ゆ。主上聞召驚らせ給ひ。宥め申けれども。木ハの如く榮えゆ。其後船も入海せず。嘉應二年。住吉。社の歌合のもやを。廣田大明神。海上より羨せ給ふ由。丙三人同様ゆ夢ゆ見奉り。道因其由を聞く。まと人々の歌を乞て合せ。顕ハ社頭。雪海上。眺望。述懐。かくぞ有り。是も俊成卿判し。迹懐の歌ゆ。二條中納言實綱卿。左大弁の時。宰相教長入道ゆ。ひく。佐山のわ。下る。我身なれども。川ゆ。舟なり。ゆ彼卿。四位五位の間。頭要職を經。舎弟二人ゆ越られ。沈淪せられ。仁安元年。蔵人頭ゆ補し。同二年参議ゆ。任し。右大弁を兼ね。三年従三位ゆ叙ね。嘉應二年。左大弁に轉ね。昔の沈淪の恨も散ず。程に。ゆく。ゆ續き昇進せられ。ゆ。此歌詠ゆ。思ふ。□弟中納言。宰相中相ゆ。程ゆ。同三年。正月六日三位せられ。ゆ。坊官の賞ゆ。正時の人沙汰し。ゆ。左大弁越られ。ゆ。此歌の故。ゆ。侍ゆ。今朝見れば。濱の南宮。焼たり。ゆ。又云く。同歌合ゆ社頭雪を。女房佐の白雪。この後。濱の南の宮つくり。改く。夜半ゆも見ゆ。同社歌合ゆ。廣宣。人ハ。ゆ。吾ゆ。神垣

や廣田の濱ふ白雪ちかく多し全書を閲見るに詞花集ふ神祇伯顕仲廣田おく歌合に侍るやく寄月述懐やいふ侍くれば左京大夫顕輔難波江の芦間ふ宵やどる月見れば我が身ひとつ沈まれるかな新続古今集ふ六條入道前太政大臣今日まぐいかくらつ行末いめぐみ廣田の神ふまもせむ百錬抄ふ後堀河天皇嘉禄元年十月廿七日今夜廣田社の神殿焼亡し和垂跡以来のことなり御躰も焼損し給ふ由見色下ア行く世の状い哀しくれやも尚も御霊威の易ア給ふ証い後崇光院親王の御記應永廿六年六月廿五日の下ふ抑大唐蜂起のことや沙汰あり出雲大社震動し血を流し西宮荒夷社も震動し又廣田社より軍兵數十騎出く東方を指し行給ふる其中ふ女騎の武者一人大将の如しそもの神人是を見奉アく後狂を發しわや社家より注進せしかば伯二位馳下アく実否を尋ねる異国襲来の瑞相勿論欽まれ廿四日夜八幡宮鳥居風吹うわふ顛倒せり若宮の御前の鳥居ちり侍りやきの橋折●く廿九日北野社御霊西方を指く飛給ひ御殿御戸開くやく聞くく諸社の怪異驚入る者なりやく宣るらふ神祇伯やあるい白川二位資忠王なアやく御社の御祭ちぐの時い伯殿の自ら下アく坐るよう

伯家部類ふ紀されたり御記ふ又曰く唐人襲来先陣の舟一両艘已ふ合戦あり大内若黨丙人大将やく為く海上ふ行向く退治其以前神軍有奇瑞之由注進七月廿日抑聞唐人襲来く既ふ薩摩之地ふ付く国人やく合戦唐人若干伐れ国人も伐る唐人中ふ鬼形の如き者あり人力もく責ぐたり廿四日下ふ薩摩ふ付異賊い蒙古云云八月十一日抑唐人襲来去る六月廿六日對馬ふ貮大友菊地以下合戦異賊打負若干討る大将軍二生捕大風吹く唐船數多破損し海ふ入る九唐船二万五千艘生捕大将兵庫ふ来云云九州探題渋河満範ぐ七月十五日注進状を載たりく六月廿日蒙古高麗一同ふ引合く軍勢五百餘艘對馬嶋ふ打寄せ彼島を打取り候間我等太宰少貳ぐ勢許ふく時日を移はば浦々泊々の舟著ふく日夜の間合戦を致候間敵御方死ちる者其數を知らぐ云云九国の軍勢を相催し廿六日合戦を致候間異国の軍兵三千七百餘人打取斬弄その外い數を知らぐ捻く敵の舟海上ふ浮ふもの一千三百餘艘なり云云合戦最中奇特神壇不思議之事一篇なりぐ敵の舟ふ於く雨風震動し雷やぐろき霰ふり大寒手おいえく打物の束も握らぐ冰死ちる者其數を知らぐ就中奇瑞ふい合戦の難儀の時節、づくよりやく知らぐ大船四